

廣助旅日記の紹介

平成二十八年九月

廣助は我家創設覺兵衛の二代目になります。廣助も本家からの養子で、覺兵衛とは叔父と甥の関係になります。その廣助が書いた旅日記があります。それを紹介します。

●その頃の廣助

廣助の旅日記(下写真右縦20.4cm 横9.3cm)は文化九年(約二百年前)に書かれています。廣助三十一歳の頃です。廣助が養子婿に來たのは文化三年二十五歳と想定しています。その理由は養父覺兵衛の息子が文化二年四月に七歳で亡くなり家を継ぐ者が無い状態であったこと、廣助の娘が文化十年に七歳で死亡(文化三年誕生)の位牌(下写真中央)が残っている(四坊山に墓はない)ことから推測しています。また「文化三丙寅春 黒椀拾人前 南紀栗屋 五兵衛」と箱書(下写真左)された空箱がありました。廣助の結婚で用意した品でしょう。婿入の翌年養父が亡くなり、文化五年に主屋居室部を建立、文化六年に郷土職譲受、文化七年に主屋座敷部建立と続きました。また、座敷部の整地面の下に整地面があり、胞衣壺があったことから、その位置に旧居室部あり、座敷部建立前に撤去し一部移築したと推測しています。

このような多忙な日々を過ごし、文化九年に旅に出ています。

養父覺兵衛が建物、郷土譲受も計画し、それを成し遂げる前に養父は亡くなる。それを達成し自由を得た廣助が旅を計画したのではないだろうか。覺兵衛のメモと思われる資料から足軽で参勤交代に随行したと推測しています。その旅の話聞くか、もしくは持ち帰った旅ガイドブックを見ていることも想像できます。養父の言い渡しの重荷が解け旅に出たのでしょうか。

廣助は旅から戻った後も文化九年に長男源右衛門正方の誕生、文化十年に長女の死去、次男文助正理の誕生、道具蔵の建設(移築)等と忙しい人でした。

●入湯願そして出発

旅の話に入ります。まず出発の手続です。以前に紹介しましたが、文化九年三月に入湯願の扣が数枚残っており何回か提出しているようです。そこには「病弱で医者を進めもあり療養のため有馬温泉へ行かせて下さい」との記載があります。この二つの文書を見ると面白いことが分かります。

・その一 医師の診断書及び証人付 次頁下右写真
奉願

私義近年腰痛仕醫師黒岩雲仙調業

相用候得共同然二付有馬入湯可然旨差圖

仕候間於有馬七廻り入湯御暇被仰付より今度

奉願候尤家來壹人召連立川口通り

罷越帰リハ甲浦通罷帰り度奉存候勿論

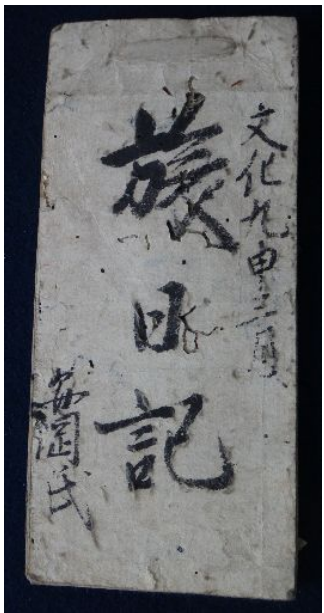
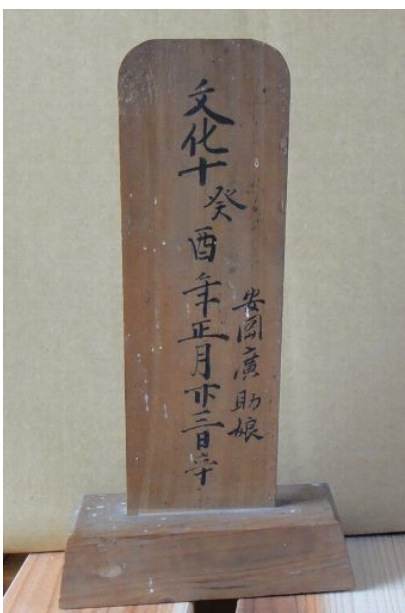
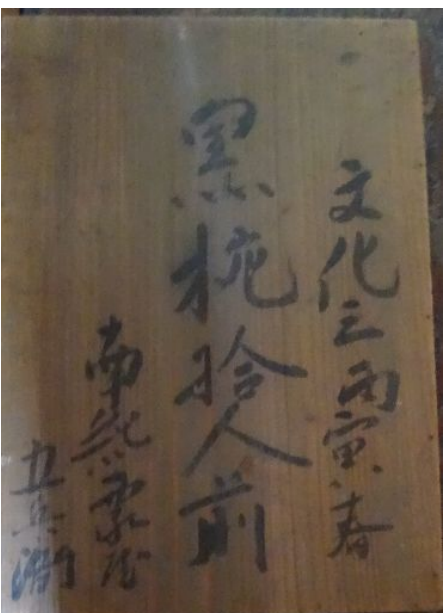
御国御法度堅相守猥リニ遊興ケ間敷義

且奉願日數之外他国ニ居留リ等仕間敷候

別證據人門田與右衛門相立差上申候間

奉願通御聞届被仰付候今度奉願候

右之趣宜様御執成被仰付候今度奉願候以上



文化九年申二月

安岡弘助

谷村七之丞殿

深尾藤右衛門殿

右安岡弘助腰痛仕尔来私療治仕候

得共今々同然二御座候二付有馬入湯可然旨

差シ圖仕候口相違無御座候 以上

月日

黒岩雲仙

安岡弘助奉願候趣相違無御座候二付

私證據人二相立申候 以上

月日

門田與右衛門

・その二 郷士身分証明付 下左写真

(裏に表と関係ないことが書かれている)

差出

一上下男式人

壱人 深尾丹波殿御預郷士 安岡廣助

壱人 家来 藤七

右者(八)私儀近年病症口■二付

者有馬日數五廻り入湯仕度尤大

坂御屋敷江茂立寄り申度奉願以

願之通御聞届被仰付候二付来ル十一日

出足立川口通罷越之間出御切手

被仰付被下度奉願候 以上

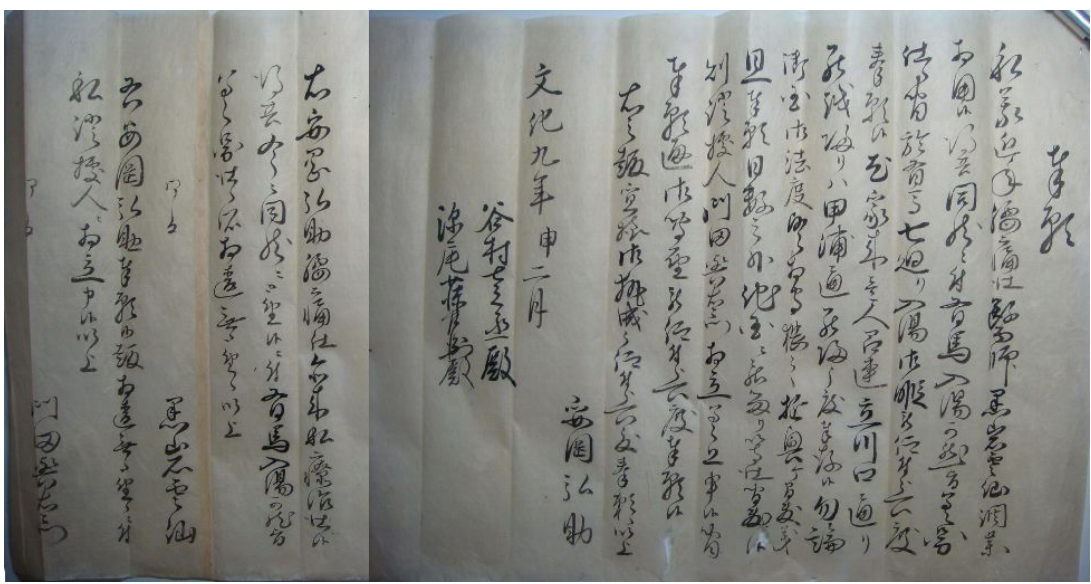
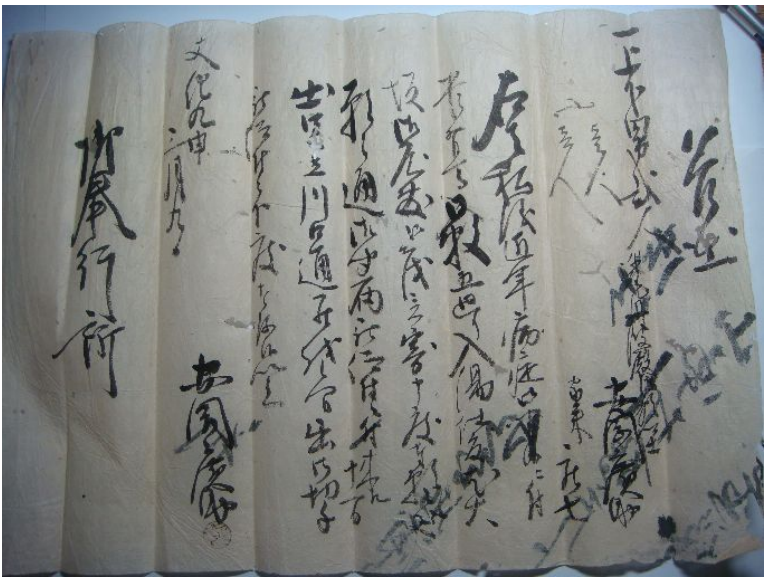
安岡廣助(丸印)

文化九申 三月九日

御奉行所

いずれの願いも往きは四国山脈を越える立川(たじかわ)の関を通りたいとあります。前頁には帰りは海路で甲浦となつていきます。右下写真の差出日付が三月九日と記入されていますが、前写真真は証人の覽の月日は未記入、本文では二月のみ記載で日付なしになっていますので二月提出分の控なのでしょう。

右下写真で十一日に出足し立川口を通過したいとあります。藩外出足の許可を貰い出発直前の関所通過の切手を貰う仕組みだったのでしようか。当初、二月出したが中々許可が出ないので三月に再度出そうとしたと、考えましたが、許可の通知書が残っていないので、口頭で申し渡され、出足直前で関所通過の切手を要求するとか、その手続は不明です。九日に提出して、十一日に切手〓通行手形カが受けられるのでしょうか。役所にしては仕事が素早



いので、手続を調べる必要があります。いずれにしても藩外へ出る手続は面倒であったようです。その後の旅日記を見ると藩外に出た後はチェックは厳しくないようです。

旅日記に記載された出発は三月十一日です。旅日記を見ると色々の方から旅行用品を頂き、自分のを含め旅行準備しています。意味不明の物もありますが、次(上が原文 下が解釈)に示します。

佐らしIIサラシ、左むたいII作務衣、銚壹本(廣助)、弓壹張(廣助) 羽織(・・たII三尺三寸など寸法付)など
慌ただしかったためか、別れの宴はないように見えます。

●旅の行程

廣助の旅は四国山脈越え、瀬戸内海を渡り、海岸沿い大坂、奈良、京都、大坂、明石付近から船旅日記記載なしで高知に戻っているようです。この旅を辿ってみます。

◆四国山脈越え

立川関所を抜ける参勤の行程は布師田く領石く穴内く本山く川口く立川く笹ヶ峰く馬立く川之江への道を辿ったようです。土佐公記に参勤の出発後、布師田で祝い、交代で帰高の際、同じように布師田で祝膳がでています。

この道士佐北街道を最近歩いた記録(逆方向)がインターネットにあり「一日目」JR 川之江く上分「二日目」金田く平山「三日目」平山く堀切「四日目」新宮く下り付「五日目」笹ヶ峰峠越え「六日目」立川く大杉橋「七日目」本村く本山「八日目」領石く高知となっていました。

旅日記では次のようになっていました。

三月十一日 出発(山北) く十二日弥生(不明) く十三日立川(*下写真
右側) く十四日川之江

逆コースで上り下りの差があり単純に比較できませんが、七日間と四日間の差があります。

旅二日目に、一見歌のような記載で離れる故郷を懐かしむ歌カが記載されています。歌にはなっていないようでしたが、自分の心情「故郷を離れるのが寂しい」と読むのでしょうか。何か和歌を読んでいてその流れに沿ったわざとらしい歌にも聞こえます。時々、このように自作の歌が書きこまれています。

◆お寺巡り

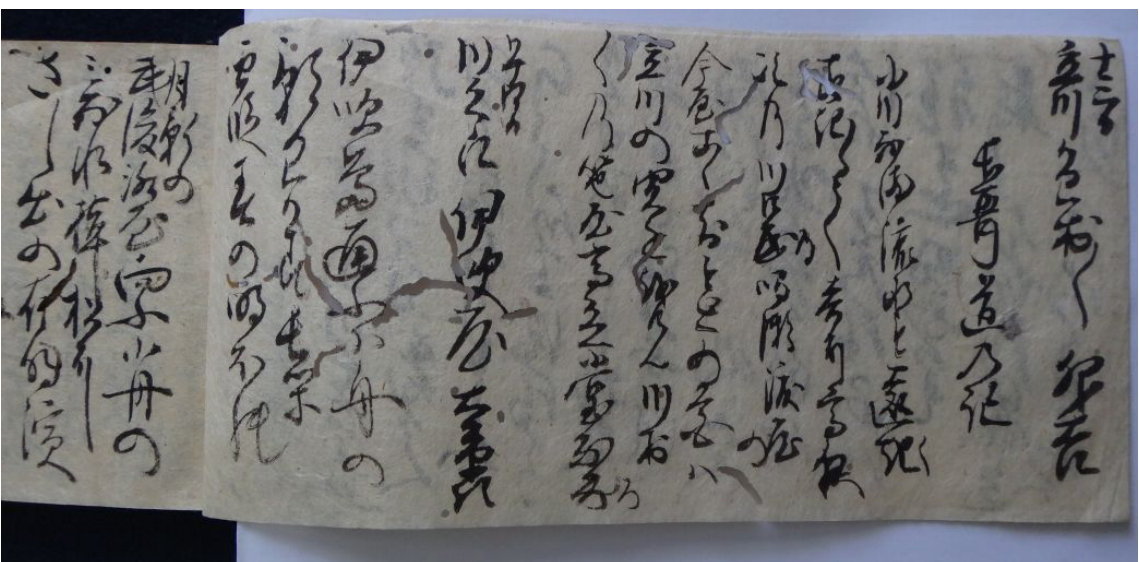
十四日川之江から丸亀に行きます。次の歌カが(下写真左側)書かれています。

伊吹島 通ふ小舟の／朝巳(き)り春(の) 長栄／霞 春の明本(ほ)能
(の)／月影の／武後瀧屋向ふ 小舟の／□□□棹松ふし／さし出の有
明濱(下写真左側)

有明濱は現在、川之江付に海水浴場となっています。伊吹は宿泊した伊吹屋のこととその付近の風景を歌っています。歩いて「丸亀 観音寺」に寄っています。

十五日から場所が特定できていないのもありますが、大坊御□見物 彌谷寺、岩家、前通寺(善通寺)、毘比羅、金毘孫と巡っています。

海路でなく立川口通過で願い出たのはこれらのお寺を巡るためではないかと思えます。



◆道中名所旧跡巡り大坂へ

お寺巡りを終え、十八日瀬戸内海を丸亀より渡ります。参勤交代では丸亀出船し牛窓から播州(赤穂付近)室津まで船路です。廣助の船路は不明ですが、今の宇野付近に出たと思われれます。そこから陸路で岡山の吉備津宮参詣し岡山に出ていきます。陸路で岡山に十九日に出て廿一日に姫路に着きます。現在の鉄道路で宇野から岡山經由で姫路まで約百二十キロです。四日間として一日三十キロ(七里半)時速五キロで六時間、姫路の前が片島と言う所で宿泊し、そこから六里とあります。一日六里二十四キロから三十キロは歩いたのでしよう。大分速足で歩いたと思われれます。このような速歩でも、名所旧跡、古今和歌集などに出て来る所に寄っています。姫路以降に尋ねた名所旧跡と思われる場所を次に記載します。

廿三日 ・曾禰の松 ・住吉之宮 ・高砂之松御老之松

廿四日 ・人丸(人麿)塚 ・逆本桜 ・船梅正則塚 ・舞子濱 ・アツモリ塚 ・一谷 ・清盛塚

そして、大坂に到着です。藩外に出る理由にした有馬温泉には全く近寄らず、大坂に到着です。

その後廿八日までの四日間、大坂で何かを見物しています。日記が虫食いで判読できず不明です。入湯願い記したように「大坂御屋敷」にも行ったのでしょうか。藩外に出れば脱藩した者でも取り締まりは厳しくないように思います。

◆奈良名所旧跡巡り

廿九日大坂を出て一日で奈良に到着します。四月朔日に春日大社に行つてます。このとき春日大社の御守(左写真)を購入しています。

四月一日から奈良の名所旧跡を巡っています。

地名か不明の部分もありますが、見物と書かれた後の名と宿と書かれた地名と宿屋名を次に記載します。

一日 カキノ本(柿本寺) 在原寺(現在 在原神社

三輪明神* 桜井村「大狗屋」に宿泊

二日 談峯(*談峯神社) 長谷寺 三木松「ぬし

屋」に宿泊

三日 カイト村「坂本屋」に宿泊

四日 ロケン茶屋 「山田屋」に宿泊

五日 いせ九谷太夫 「川之左白屋」に宿泊

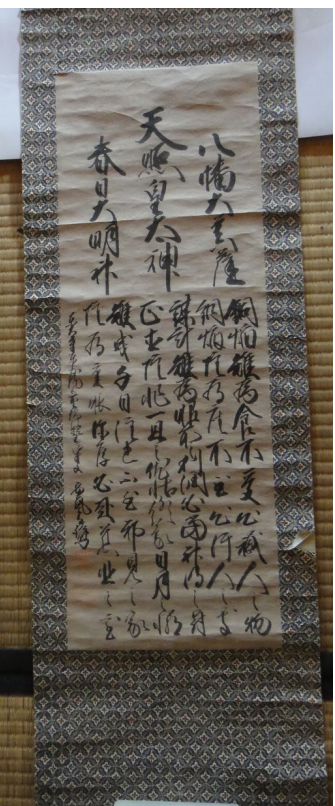
六日 「川島屋」に宿泊

七日 釈道十里金口モト 「小松屋」に宿泊

八日 筆捨山関及地藏 水ふ口「泉屋」に宿泊

九日 秀郷富石山寺 玉口手山

前述の名所旧跡を含めこのように計画的に多数の箇所を巡ることができたのは、網羅的なガイドブック等で事前調査をしたのだろうかと思えます。奈良に着いた日に「別紙道記通」と記載があり、別紙は残っていないし何が「通り」なのか不明ですが、ガイドブックのようなものがあつたのでしょうか。



◆お伊勢まいり

大坂から伊勢への街道があり、大坂から暗峠を越える奈良街道を行き奈良から東に長谷寺を通り伊勢まで行く、伊勢本道・初瀬街道があります。

廣助の行程を見ると、一日に奈良を出て、桜井村・長谷寺を見物し五日に「いせ九谷太夫」の「川之左白屋」に宿泊(下写真三行目)しています。

ここまでの日記の宿泊場所の書き方は、地名の次の宿屋名・宿の主人の名でしたので、「いせ九谷太夫」は地名になります。街道の道筋、五日間の行程から「いせ」は伊勢と考えます。

行程の記録とは別にお土産などの買物記録もあります。その中に通常の買物ではないと思うような項目がありました。次の二箇所にあった大神宮です。後半の記載が下左写真の後から六行目。

四月朔日 春日 八まん

一銭 四百文 御守代

同

一同 五拾文 墨代

同五日

一同 九拾六文 大神宮

御初尾

.....

一八銭六分式厘 □元差引

一八銭五分五厘 同

八銭貳分 同

一百八文 大神宮

.....

前半は春日八幡で御守を四月朔日に購入後の四月五日の大神宮 御初尾、後半の大神宮は日付は特定できていません。

大神宮とは伊勢神宮のことで、初穂料＝御初尾を払いお祓いを受けたのでしょうか。何故か初穂料金が違っていますが、一方は家来藤七ので、後半が廣助の支払です。

この旅行の目的は伊勢神宮、お伊勢参りで、温泉療養ではなく、お伊勢参りも終わっても旅を続けています。その旅の概要は次の通りです。下の写真にその原文で七日目以降を示します。

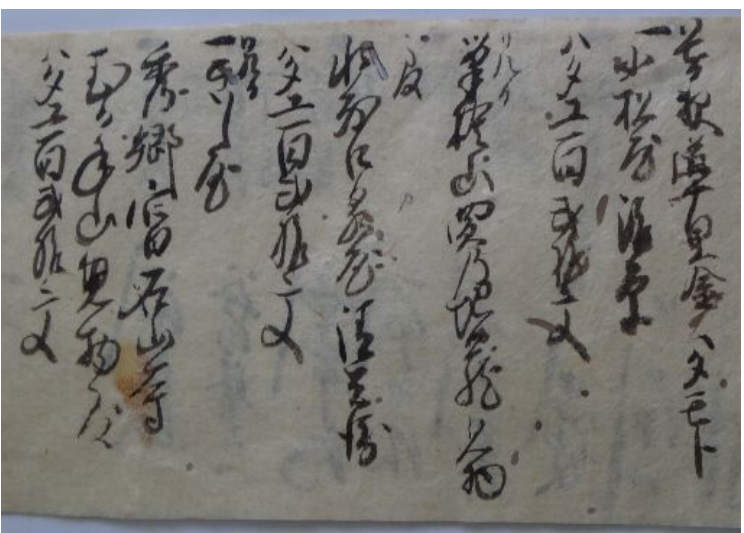
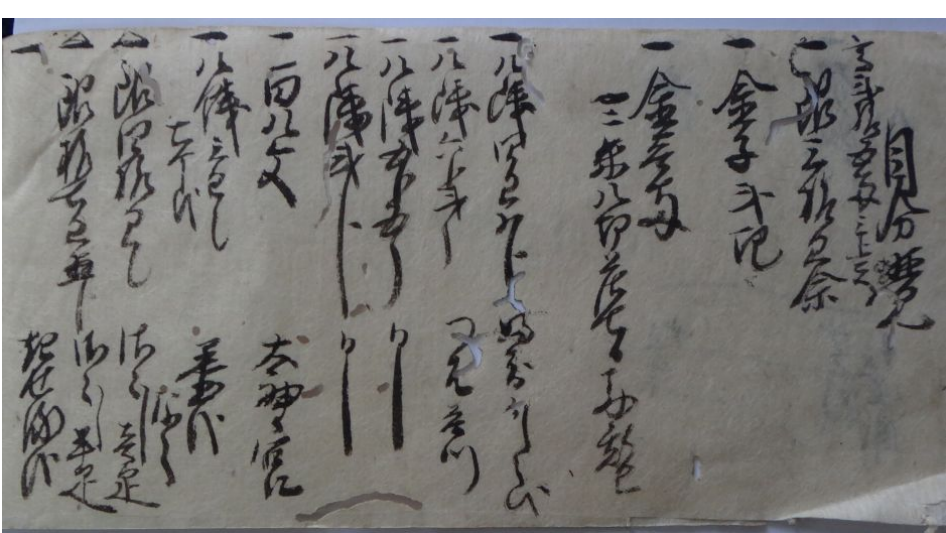
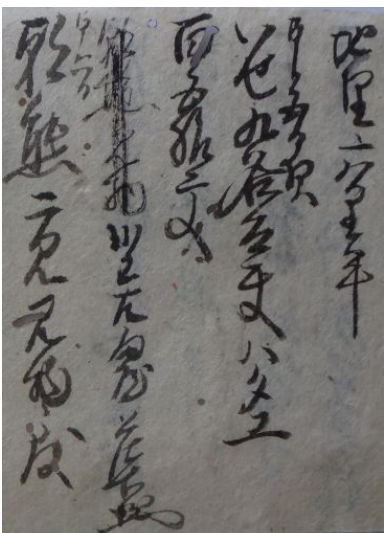
六日 伊勢出発 朝熊二見見物致

川畠屋 宿泊

七日 小松屋 宿泊

八日 筆捨屋関乃地藏見物 水な口 泉屋 宿泊

九日 秀郷石山寺 玉□手山見物致

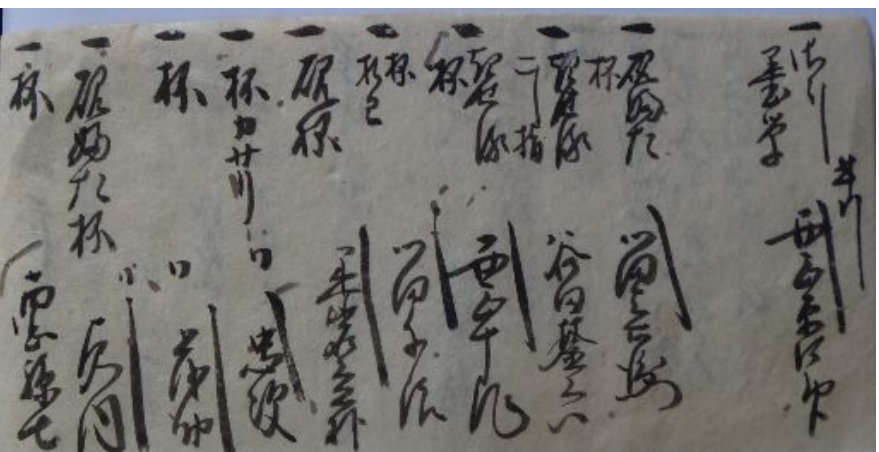


六日の朝熊(あさま)は伊勢神宮の鬼門を守る金剛證寺がある山で、二見は二見ヶ浦で伊勢付近の海岸です。八日に筆捨山関乃地藏を見物しています。この山は旧の東海道の脇にあり、その夜は水奈口に宿泊しています。水奈(な)口は水口で、地元の読み方「みなくち」で字にしています。地名の多くはガイドブックのような文書から写したのではなく、地元の人に聞き、書き留めたのでしょうか。意外なのは伊勢の裏山「朝熊」です地元では「あさま」と話すのに、正しい漢字名で記載しています。

廣助は東海道路を通り九日に大津の近くの石山寺に入ったのです。京都に十日に入り十日間滞在します。九日以降の宿が京師(京都)または大坂なので、五月上旬まで、大坂、京都で見物か買物をしていたと思います。伊勢から京都に入り永逗留し、大坂に移りまた永逗留し、計二十日間以上居ました。どこまでが予定した計画だったのでしょうか。

◆大坂・京都での買物

廣助は京都・大坂に二十日間居ましたが、何故か見物に行った箇所の記事はなく、買物、お土産の記録しかありません。お土産を名前と対応して記載されています。



例えば

墨筆 安岡平四郎

一 硯婦た

杯 留三右衛門

一起せ流 谷田基六

...

とあります(上写真)。

墨筆の土産は珍しく、硯婦たⅡ硯蓋を六、杯を三十購入しています。杯は小さく荷にかさ張らないので、持ち帰り土産に良いと思います。杯と者し(はし)の人とそうでない人がいます。硯婦た、蓋だけ貰っても硯と箱がなければ用を足さないと思いますが、この頃硯蓋とは菓子皿のことのようです。これも平面で荷にはかさ張らなくて良いのでしょうか。この時購入したのではないでしょうが、左に三枚組の硯蓋(上左写真 大:幅41.0奥27.5高5.0 中:幅39.3奥21.7高2.3 小:幅38.0奥21.5高2.0)を紹介します。

文化九年で煙草を吸う人がいたようです。二人の人に 起せ流Ⅱキセルをお土産にしています。刻み葉を地元で手に入れたのだろうか。キセルをお土産にした谷田基六、西正十作、姓を廣助が記載しているから郷士以上の人でしょう。墨のお土産もあり、これも金水寺とか安岡利弥太など数少ないです。



お土産だけでなく当然、自分のも購入しています。文化九年で郷士になった直後であるためか、武具、馬具に余

り興味を示していません。綿製品は地元にもあるでしょうが、上方の品は良いのか、綿屋伊平から次の品を購入しています。

一銀四百式拾匁也 羽織、

一銀三拾八匁也 ち、ふ壹疋

一銀拾匁也 志満半疋

一銀式拾五匁也 紅志満半疋

羽織以外は布の種類と思いますが、判りません。その他、数多く買物をしています。

九日に石山に入り、十日から京師の近江屋に宿泊、その後大坂に入り土佐屋に十日間滞在します。

◆滞在と費用

前述のように旅日記には宿泊した宿の名、宿の在る村名、宿の主人の名、そして宿代が書かれています。この宿代が百式拾文(前頁左写真 ハタコに続く)です。後日、機会があれば紹介しますが、東海道筋でもほぼ同じ額です。上から統一指示が出ていたことも考えられます。三月十一日から五月五日までの五十二日間の旅、宿代百三十文として六千二百四十文。家来一名随行しているので倍の一万二千四百八十文となります。この金額の重さが分からないので現在の一般的なビジネスホテル五千円で計算してみます。五十二泊の二人で五十二万円。お土産代、昼食代などを入ると百万近い金を持ち歩いたことになりそうです。為替などの手法があったように思います。

京都に四月十日に到着してから、見学先など記載がなく不明です。出発の五月四日までの二十四日間京師(京都)または大坂などに滞在しています。この長期滞在の目的は何にでしょうか。買物は日付から京都で行われています。大坂の十日間も何をしていたのでしょうか。旅の目的でなく、この永い滞在何かあるか、単に遊んでいただけか、休んでいただけか。大坂の滞在について次の記載(下写真)があります。

四月廿一日大坂土佐屋

重兵衛宿ス

五月二日四日出足 日数十二日

三人前

ハタコ廣助を出

高砂之浦而舟留ス

.....

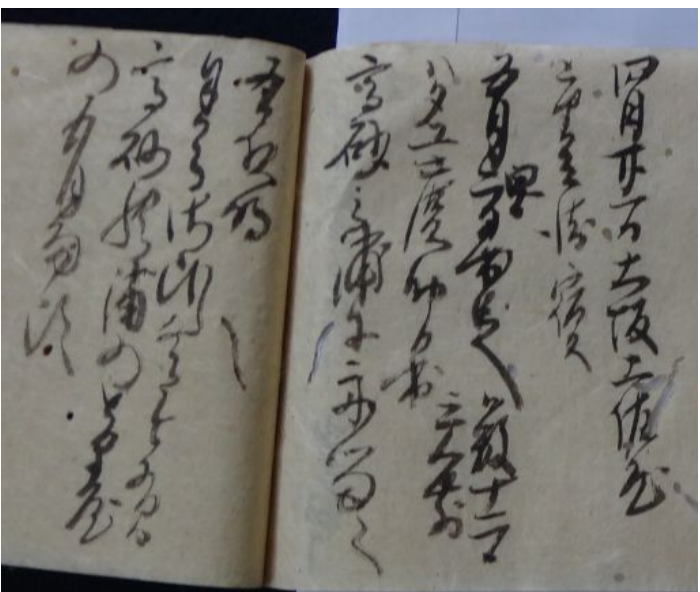
家来一人が何故か三人前支払っています。

◆帰高

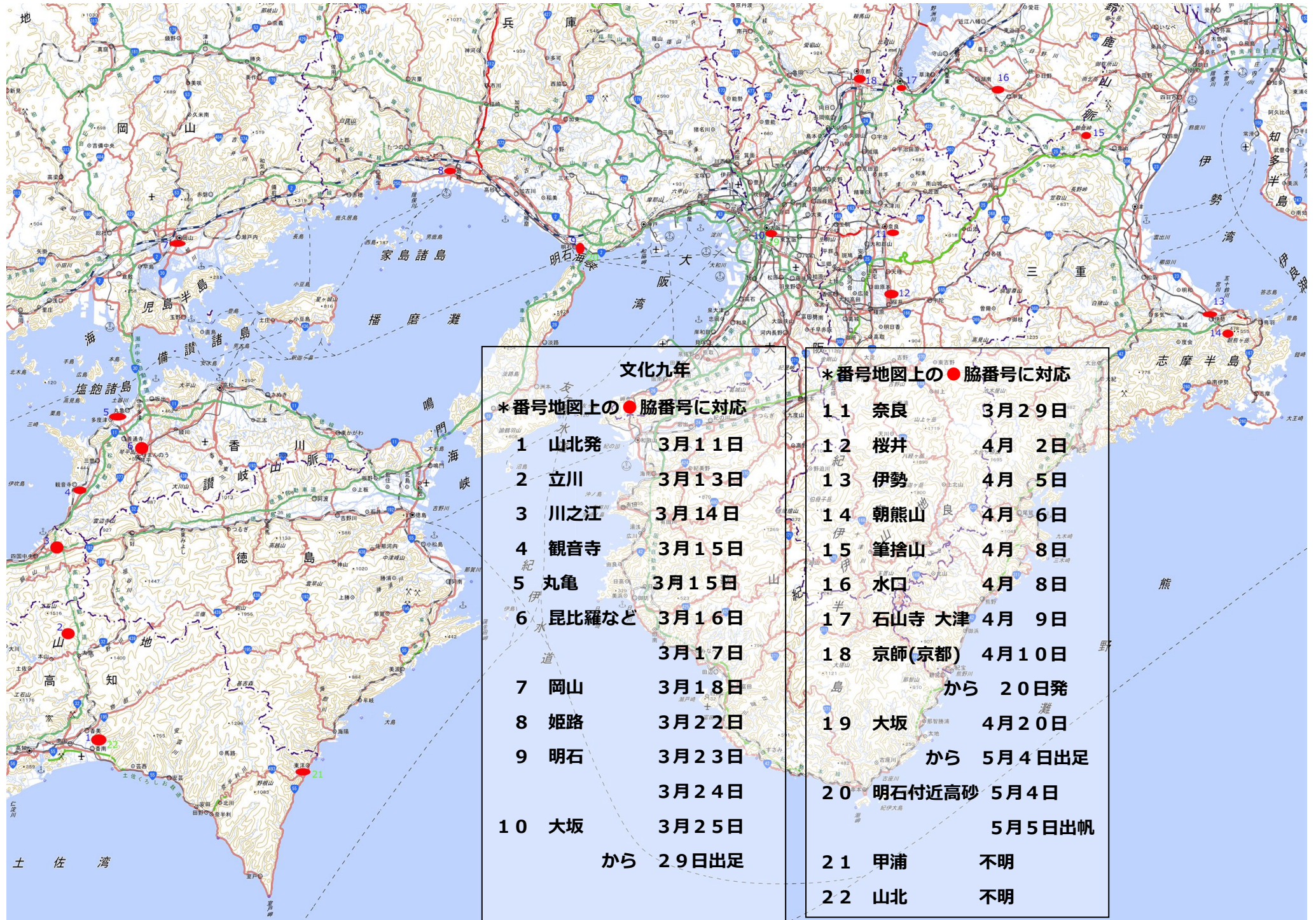
五月四日に高砂浦から出帆したようです。高砂は大坂から離れているので少し疑問があります。高知の寄港は甲浦と届いていますが、どこまで行き、どこから歩いたのか帰りの道中は到着日など一切記載はありませんので不明です。

大坂、京都での永逗留、届と異なる旅のコースなど不思議な点が多々ありますが、この記録から藩外へ出る手続は面倒ですが、出れば自由はあったようです。金があれば脱藩でも自由になったのでしょうか。旅に疲れたのか。

その後は廣助は旅に出ているようです。忙しく出れなかったのか、旅に疲れたのか。伊勢参りですが、文化九年から百十九年後の昭和六年に山北の地元で伊勢講を作り伊勢などの旅に行っています。船中一泊で大阪着、そのまま奈良の春日神社から伊勢へ、翌日伊勢神社、二見浦等を参拝見学して京都へ行き宿泊、そして京都の名所旧跡十八ヶ所を一日で巡った後、大阪に行き翌日戻っています。



以上



文化九年

* 番号地図上の●脇番号に対応

- 1 山北発 3月11日
- 2 立川 3月13日
- 3 川の江 3月14日
- 4 観音寺 3月15日
- 5 丸亀 3月15日
- 6 昆比羅など 3月16日
- 7 岡山 3月17日
- 8 姫路 3月18日
- 9 明石 3月22日
- 10 大坂 3月23日
- 11 大坂 3月24日
- 12 大坂 3月25日
- 13 大坂 3月26日
- 14 大坂 3月27日
- 15 大坂 3月28日
- 16 大坂 3月29日
- 17 大坂 3月30日
- 18 大坂 3月31日
- 19 大坂 4月1日
- 20 大坂 4月2日
- 21 大坂 4月3日
- 22 大坂 4月4日

* 番号地図上の●脇番号に対応

- 11 奈良 3月29日
- 12 桜井 4月2日
- 13 伊勢 4月5日
- 14 朝熊山 4月6日
- 15 筆捨山 4月8日
- 16 水口 4月8日
- 17 石山寺 大津 4月9日
- 18 京師(京都) 4月10日
- 19 大坂 4月20日
- 20 明石付近高砂 5月4日
- 21 甲浦 不明
- 22 山北 不明